

## 第 31 回技術倫理協議会議事録

日 時：2010 年 7 月 15 日（木） 17 時 30 分～19 時 45 分

場 所：建築会館 3 階 307 号会議室

出席者：（順不同、敬称略）：

議 長：池田 駿介（工学会）、幹 事：札野 順（日工協）、櫛田 晴美（技術士会）

委 員：鶴原 稔也（信学会）、滝澤 照廣（電気）、皆川 勝（土木）伊藤 卓（化学）、  
大輪 武司・堤 正臣（機械）、高橋 信之（建築）、大場 恭子・平野 琢  
（原子力）、宅間 正夫・山田 郁夫（工学アカデミー）、剣持 庸一（日工協）

アドバイザー：長島 昭（機械）

事務局：四戸 靖郷・柳川 隆之（工学会）

配布資料：

資料 31-1：第 30 回技術倫理協議会議事録（案）

資料 31-2：2010 年シンポジウム企画案（幹事会）

資料 31-3：講演資料（村松 秀 殿）

資料 31-4：技術倫理協議会委員名簿（2010. 7.15 版）

議 事：

### 1. 前回議事録確認

配布した案に間違いが多く含まれていたため、後日事務局から修正版を送り、確認してもらったことになった。

### 2. 2010 年シンポジウム企画

池田議長から、7 月 9 日に議長、幹事およびシンポジウム担当学会代表者によって検討した結果に基づいて、企画案が説明された。

講演依頼先として公的研究所は難しいのではないかとの意見が出され、札野幹事が公的研究所での活動状況を調べることになった。また、村松 秀氏が 11 月 20 日か 27 日に講演が可能かどうか札野幹事を通して連絡してもらったことにした。

シンポジウム企画については、時間不足のため、メールにより意見を提出し、計画立案を続けることにした。

### 3. 講 演

村松 秀 殿（NHKエデュケーショナル 科学健康部 シニアプロデューサー）から、「史上空前の論文捏造～番組取材の現場から～」と題して、ヤン・シェーン（米国ベル研究所）による高温超伝導およびファン・ウソク（韓国ソウル大学）によるヒトクローン胚由来 ES 細胞に関する論文捏造事件の詳細、問題の背景の分析結果および科学コミュニティの課題について講演が行われた。講演のまとめとして、科学倫理を考える上で次の 2 点を明らかにする必要があることが述べられた。

○21 世紀の今、科学とは何をするものなのか？

○科学者とは何をする人なのか？

この講演に対して、次のような意見交換があった。

- \* 社会環境もそうだが、事件の原因は個人の名誉欲が大きいのではないか。(剣持)
- \* シェーンはベル研転職後 3 年くらい論文が出ておらず、ポストを失う危機感があつたかもしれない。(村松)
- \* 一つ成果を出すと、よい成果を出し続ける圧力が働く。成果主義のせいであり、科学を純粋に楽しむ環境がなくなっている。(池田)
- \* 関わった人の意思が働かなくなるとこういう問題が起こりえる。モラルの問題でなくて、もっと深い科学の問題である。(櫛田)
- \* 国際標準への登録の仕事を調べたが、こうした捏造の事例は他にも沢山ある。(長島)
- \* この事件の原因には、構造的な面と人間の本質的な面の 2 つがある。(宅間)
- \* 論文の審査は普通性善説に基づくが、この事件のようなことがありえることも受け入れる必要がある。(村松)
- \* 科学の世界で大切なのは自由な発想であり、うまくゆかないことも許すのが科学の世界であるべきである。そうでないとブレークスルーは生まれない。暗いものになってはならず、楽しいものにしないといけない。(池田)
- \* 「正しい」ということは基準がないと言えないが、新しいことは基準がない。最近はお金のかかる研究に傾いているが、お金がかからずに面白い研究があることに気付くべきである。(長島)
- \* 真理らしいものはあるが、絶対に正しいものはない。科学は真理らしいものに近づいてゆく過程であり、うまくゆかないこともある。(池田)
- \* そういうところに倫理がからんでくる。過去 30 年間に産業界に絶大な影響があるかもしれないことに 3 件出会った。おかしいと思われながらだんだん正しいと認められてきたということもある。(長島)
- \* ベル研の問題が 3 年間で片付いたことは、むしろ健全さを感じた。(大輪)
- \* 「若者の眼」が大切(道浦母都子『無援の抒情』より)というが、老人の眼はどうか、すなわち、シェーンの説が時間がたつと認められる可能性もあるのではないか。(高橋)

次回は、8 月 30 日(月) 17 時 30 分から建築会館 306 号室において開催する。

以上